

『戯場百人一首』演劇資料としての狂歌集

山 田 和 人

『戯場百人一首』は、絵入りの狂歌集である。『小倉百人一首』をほぼ順番にもじって、当時の劇場の様子を読み込んでいゝる。下の句は百人一首のままにして、上の句だけをもじっている。狂歌そのものとしては、必ずしも秀逸な狂歌集とは言えないかもしれない。だが、収められている絵とあわせ見るとき、文化・文政頃の江戸の劇場の生態を捉えるうえで興味深く、演劇資料として資するところの大きい狂歌集といえる。

構成は、半丁ごとに二首の狂歌を配している。百人一首の作者順にそれをもじった狂歌を、上部に配し、その下に、それぞれに勝川春亭の絵が描き込まれている。この画文一体の構成が、当時の劇場の様子をあますところなく捉え、客席、舞台、役者、道具、畳などいさゝか描きし得ている。

本書は、文政三年に初版が刊行され、文政六年に再版されている。再版の際に、岩井半四郎の小野小町、市川団十郎の在原業平の絵表紙を付している。

なお、本書は、国会図書館、京都大学、早稲田大学、西尾市立岩瀬文庫、武藤禎夫氏を始めとして、相当数が所蔵されているようだが、今回は、文政三年版、六年版とともに所蔵している、洛東遺芳館本を用いた。ただし、文政三年版には一部破損箇所があり、それについては、文政六年版で補った。参考のために、文政六年版の当該箇所及び、六年版の表紙を影印

編の最後に掲げた。

平成十一年二月に、武藤禎夫氏の『もじり百人一首を読む』（東京堂出版）が刊行され、『戯場百人一首』の狂歌六八首、挿絵八図が収められたが、前述のように、本書を演劇資料として位置づけた場合、狂歌と絵を共に影印で収めて紹介すべきであると判断し、ここに全文を掲げることにした。

書誌の概要

所蔵 洛東遺芳館

外題 戯場百人一首

内題 小倉／狂歌／戯場百人一首

一題簽 原題簽 「戯場百人一首 全」

表紙 原表紙 茶色 無地

寸法 縦一七・七センチ 横二二・七センチ

冊数 一冊

丁数 三二丁

判型 中本

作者 諫鼓堂尾佐丸

版元 春松軒西宮新六

奥付 文政三年庚辰春／正月吉日／鈍々亭藏版／春松軒西宮新六

丁付 上部に「百人」とあり、下に丁付を記す。

序一、序二、序三、一、四、□、六、二十、廿一、廿五。次から上部に「百人跋」、下に、廿六、廿七。続けて、上部に「百人」、下に「跋」とある。

備考 表紙見返しに、界線で三行に区分されて、右に「本町庵三馬先生序／諫鼓堂尾佐丸戯作」、中央に「小倉／狂歌／戯場百人一首」、左に「勝川春亭狂画（印）」とある。

他に、後刷りの二冊合冊本がある（以下、仮に上下と表記）。

所蔵 洛東遺芳館

外題 なし

内題 以下の通り

上 狂歌小倉百人一首 文政六年癸未春新版開兌 式亭三馬編撰 栄久堂板

下 狂歌小くら百人一首 式亭三馬ゑらふ 山もと栄久堂にちりはむ

題簽 なし

表紙 原表紙 茶色 無地で合冊。各冊とも、彩色 絵模様の表紙。

上 「式亭三馬撰 狂言百人一首全 発行栄久堂」

下 「当時高名家百人一首狂歌撰 文政癸未の春 よし町川おやち橋角 山本版」

寸法 縦一七・九センチ 横二二・四センチ

冊数 二冊

丁数 各十五丁

判型 中本

作者 諫鼓堂尾佐丸

版元 山本栄久堂

奥付 なし。裏表紙見返しに出版目録あり。

丁付 上部に「百人」とあり、下に丁付を記す。

上 序一、序二、序三、一〜四、□、六〜十二。

下 十三〜二十、廿一〜廿七。

備考 表紙には、それぞれ、五世岩井半四郎の小野小町、七世市川団十郎の在原業平が描かれている。

翻刻に際して以下の諸点に留意した。

底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂を施した。

1 仮名は現行の字体に統一した。捨て仮名はそのまま残したが、それ以外の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

2 漢字は通行字体を原則とし、できるだけ異体字は用いなかった。

3 漢字、仮名ともに、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

4 畳字は、平仮名は「ゝ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」は底本のままである。

5 各丁の表・裏は、実丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）に入れて示した。

本書の紹介にあたり、翻刻を許可せられた洛東遺芳館館長香川聖一氏に深謝申し上げます。なお、本稿は、一九九六年度同志社大学学術奨励研究の成果の一部です。

翻刻篇

序

小倉山の別荘に百人一首を撰み給ひしは京極黄門定家卿なり。大劇場の花摺に一人百首を詠たりしは諫鼓堂尾左丸なり。彼は万葉古今集。猿若ならぬ和歌の書拔。第一番めの時代狂言にして。歌よみ鳥の三十一字は所謂さとの子のん太郎。坊組の眼におよばず。是は万載東西集。狂言つくし狂歌の正本。第二ばんめの世わ場にして。芝居雀の百囀りは所謂見功者楽屋探。鼈肩連の耳を飲ばしむ。素より和歌と狂歌とはおなじ茶屋から観る客に斉しく。狂言狂歌は連稿の戯場に似て。風体あり格式あり。シテワキあれば体用あり。四番続の四季恋雑。兼題上つて初日出。舞台廻つて規則立つ。序幕の縁語は大詰に興をむすび。落合の場に連続するはだんまりの幕(一オ)に糸を流せばなり。されば披講の文台は出囃子の毛氈と列り。講師読師の太夫三絃。発声坐が、りにうたひ出れば。助声の流を語るあり。此幕の出語浄るり。長うたあれば混本歌。旋頭回文つゝいて出ませうとは豈終場の言のみならんや。当坐題の達喙と代役者の達者とにあるべし。ア、ラ怪しやとは吹水をにらむ挿頭の辞なり。ぢやはいなアとは密事を囁く脚結の辞なり。申上升何ごとぢや。社すれ也覽トのよみ方。手爾葉○沓冠。伝授秘密は呷ムり升かな。さるほどに爰に又。大太刀ひらめいて三十級。張紙の首を投出すは。卜養未得の昔狂言となりて。今の看客ヤンヤとはいはず。本水を汲て本米を炊き。釜の下を寔に燃して正真の芋を煮るは。近体の小刀細工といへども。今の判者しかも新しきを喜ぶ。其はなはだしきに至ては他の(一ウ)狂言する隙に己が場落の余計をするあり。看官傍題をも不答して却て透がないと誉め空隙がないと喜ぶ。さる中にも女形の所作ぶりに醜身の道化を交ることは。古来の風体なるをもしらずして。いつも中野盗とほむるたぐひは。古へを学ざる僻見にしてせん吟等類の詠をしらざるなり。僅一チ日休座の優子を殊に大病と噂するは。博く試ざるの億説にして平頭同字の病をしらざるなり。或は江戸ぶしのひとふしある体。或は大薩摩の鬼をも取拉ぐ体など。悉くかぞへあげなば其

分りて、しんげ、やくはつげ、つぎ、迄日流行の所作事に似て。こと長ければ茲にいはず。抑和歌をたしむ芝居を好み。狂言数六体七変化。八雲八景十二月。この流行の所作事に似て。こと長ければ茲にいはず。抑和歌をたしむ芝居を好み。狂言を委く探りて狂歌ををかしく喰ずる者は誰とかする。独諫鼓堂尾左丸なり。此人上手になり過て。狂歌は素人の耳に遠く。(一才) 唯黒人の悦ぶのみ。劇場は黒人の目もおよばず素人ならぬ見功者なれば。戯房で声を啞さんことを嘆き。素人落を表にせばやと戯れにつらねし歌ども。竟には芝居百首となりぬ。狂言本をも不聞して古人の風調。微く紋切形を移し。鵜飼石をも不説して和歌の声色。細に真面目を得たり。凡百首に原たる小倉もときは多かる中にも。居宅は堺町で家名は何がし屋。給金は嘘八百両出たらめに詠出たりしてにはもしらぬたくひに比ば。此評判記は大極上。真黒吉の歌人とや告さん。晴昔近藤氏のどうけ百首。よく切落に落たり。さるを彼が上をまたぎて落首体を免れしは。口調の高土間にあるゆゑなり。迹来狂歌堂のどうけ百首。よく棧敷に受たり。さるを夫と肩をならべて狂歌体を失ざるは。句統の(二才) 続華摺にあるゆゑなり。天智天皇蟬丸も皆割籠に押合て。金毘羅さまも西行も坐順はかまはぬ百首に引かへ。番附の位を分つに○白を隔て席を定むる名人上手の狂歌人。諸国に許多のなつかよ中よ。中にもをかき戲歌。よまれたりな妙でんとすと木戸芸者の読立めかして。たしか斯様が告されし口技的人の古風に倣ひ。序に出まするは本町庵。御ぞんじの／式亭三馬戯題(印)／文政二年巳卯孟陬(三才)

序文に続けて、見開きの挿絵と狂歌がある。

僧正遍昭 芸能は秀て佳と三つ大のその大人や人の大和屋

大伴黒主 俳名の鋪の升にはかりこむひ、きは幕のあくをまつ本

在原業平 三つ組の升のすみからすみまでももれぬ巖肩は市川の水

文屋康秀 くれなるの梅の花さくひやうばんは尾上のかねの音にひびけり

小野小町 染貫のまくにひ、きとかきつはた岩井の水に江戸のむらさき

喜撰法師 わか庵はみやこのたつみ難波にて世をたのしめるはらの中むら(三ウ・四オ)

本文

天智天皇

吸ものをこぼした人の気のどくさ我が衣手は露にぬれつ、

持統天皇

水仕合すみしあとにはしほりたる衣はすてふあまのかぐ山(四ウ)

柿本人麿

娘の子あすのしばゐをまちかねてながくしよをひとりかもねん

山辺赤人

兄弟の貰ふ狩場の絵図面もふじの高根に雪はふりつ、(五オ)

猿丸大夫

入相の鐘二ツ三ツひぐらしの声きく時ぞ秋はかなしき

中納言家持

宵の間の狂言してもあんどこのしろきをみれば夜ぞ更にける(五ウ)

安倍仲麿

真白に見ゆる名古屋が紋所三笠の山に出し月かも

喜撰法師

我がのぞむさじきをよそへ渡されつ世をうち山と人はいふなり(六オ)

小野小町

狂言きやうげんもまはり道具だうぐにうつり行我ゆくわが身世せせいにふるながめせしまに

蟬丸

これやこの出るでもはいるも木戸きと口くちにしるもしらぬもあふさかの関せき（六ウ）

参議筆

大当おほあたり役者やくしや鬘まげのひやうばんを人ひとにはつげよあまのつり舟ふね

僧正遍昭

あなたがたどのさじきじやと木戸きと口くちで乙女をとめの姿すがたしばしとゞめん（七オ）

陽成院

はじめりは女でい出入しゆいの水仕みづじ合あ恋こひぞつもりてふちとなりぬる

河原左大臣

けんくわした人間まぢがひ違ひんで鬘げんの毛けのみだれそめにし我わがならなくに（七ウ）

光孝天皇

舞ふたぎ台ぎ際はからだはさのみ寒さむからで我衣わがころも手に雪ゆきはふりつ、

中納言行平

供ともに來きたでつちはうちへいなはいねまつとしきかば今いまかへりこん（八オ）

在原業平朝臣

紅絹もみじゆばん襦じゆ袷あは着ぎて投げらる、橋はしのたてからくれなゐに水みづくゞるとは

藤原敏行朝臣

伊勢
むすめの子ひいき役者を思ひ寝のゆめのかよひ路人目よぐらむ（八ウ）

けんくわする中引わけてた、かれつあはで此世をすぐしてよとや

元良親王

つねらふ趣向は親の敵役に身をつくしてもあはんとぞおもふ（九オ）

素性法師

やみ仕合手に入る文をとりおとし有明の月をまち出つる哉

文屋康秀

ひなすけと来芝と紋はかはれどもむべ山風をあらしといふらむ（九ウ）

大江千里

わりあひ割合の土間を見すて、出るをしさわが身ひとつのあきにはあらねど

菅家

みわた見渡せば土間やさじきに鬢結のもみぢのにしきかみのまに〜（一〇オ）

三條右大臣

しばぬ芝居すぎ狂言ごとにか、さねば人にしられてくるよしもがな

貞信公

ふるまひし芝居の客の心あらは今ひとたびのみゆきまたなん（一〇ウ）

中納言兼輔

さけ酒のみは茶やの来る間をまちかねていつみきとてか恋しかるらむ

源宗千朝臣

うづらまでなみだもよほすしうたんに入目も草もかれぬと思へば（一一オ）

凡河内躬恒

いくつ目か同じしるしの塵敷ておきまどわせるしらぎくの花

壬生忠峯

早かはり替る衣裳におしろいのあかつきばかりうきものはなし（一一ウ）

坂上是則

気のきいた茶屋の料理に出しものもよし野のさごにふれるしらゆき

春道列樹

画きたる川に木の葉の波まくはながれもあへぬもみちなりけり（一二オ）

紀友則

ひやうばんはあらしが当り狂言にしづ心なく花のちるらん

藤原興風

割土間に酒の相手の一二人まつもむかしの友ならなくに（一二ウ）

紀貫之

三角な紙ちるばかり色けなくはなぞむかしの香に匂ひける

清原深養父

あんどをぶらりと下げて引上る雲のいづこに月やどるらむ（一三オ）

文屋朝康

いつとても市川流の大太刀をたらぬきとめぬ玉ぞちりける

右近

切落す首ははりこでお仕合人の命のをしくも有かな（一二ウ）

参議等

手をつけたばかり肴に弁当のあまりてなどか人のこひしき

平兼盛

引く役者出を待かねる顔色はものや思ふと人の問ふまで（二四オ）

壬生忠見

美しきひぬきの役者むすめきの人しれずこそ思ひそめしが

清原元輔

仕掛よくはえたごとくに大木をすゑのまつ山なみこさじとは（一四ウ）

権中納言敦忠

気がつけばみな花道へ追てゆくむかしはものを思はざりけり

中納言朝忠

割土間におしあふて見る芝居好人をも身をも恨ざらまし（一五オ）

謙徳公

てら子やのつくへにのりしよだれくり身のいたづらになりぬべきかな

曾禰好忠

ぬれ事しかたきのあとを追つかけて行衛もしらぬ恋の道かな（一五ウ）

恵慶法師

木戸迄の急用呼でもらへども人こそ見えね秋は来にけり

源重之

にせもの、茶入は日々に一つ宛ただけてものをおもふ比かな（一六オ）

大中能宣朝臣

大詰にとほして見する燭台もひるはきえつ、物をこそおもへ

藤原義孝

うちだしの幕ををしみて見物の長くもがなと思ひける哉（一六ウ）

藤原実方朝臣

ひく役者呼で貰ふて盃をさしもしらすなもゆるおもひを

藤原道信朝臣

芝居見の留守居せよとの夕より猶うらめしきあさほらけかな（一七オ）

右大将道綱母

蟲肩する役者の幕の明るまはいかに久しきものとかはしる

儀同三司母

ひとかたなきつかけも能キかへりうちけふをかぎりのいのちともがな（一七ウ）

大納言公任

しばらくと大きな声をあげまくに名こそながれて猶きこえけれ

和泉式部

紫式部

高つきの菓子に名札をおくりては今一たびのあふ事もがな（一八オ）

駕かきはにげてのあとのやみじあひ雲かくれにし夜半の月かな

大式三位

久しぶり土間であふたは誰やらといでそよ人をわすれやはする（一八ウ）

赤染衛門

大仕かけ舞台いっばい板かへしかたぶくまでの月を見しかな

小式部内侍

大江戸くだり役者のはつぶたいまだ文も見ずあまのはしだて（一九オ）

伊勢大輔

御殿場をせり出す穴はさうじゆつのけふ九重に匂ひぬるかな

清少納言

むかしとはちがふて木戸もきまりあるよにあふ坂の関はゆるさじ（一九ウ）

左京大夫道雅

最肩ぞと役者にあふてくちづから人づてならでいふよしもがな

権中納言定頼

木戸芸者つかふこはねも出たやうにあらはれわたるせゝのあじろ木（二〇オ）

相模

ぬれごと師見るばかり手もさゝれずに恋にくちなん名こそをしけれ

大僧正行尊

大入におされてひとつせつな屁のはなより外ほかにしる人もなし(二〇ウ)

周防内侍

忠臣ちうしんののりぢの役者深手やくしやかかにてかひなくた、ん名なこそをしけれ

三條院

やつしがた見ほれし娘むすめわすれかねて恋しかるべき夜半よはの月かな(二二オ)

能因法師

舞台ぶたい際はゑがきし板いたの二三枚立田まいたちたの川がはのにしきなりけり

良暹法師

幕まくあきのきぬた拍子びやうしや田舎いなかうたいづくもおなじ秋の夕ぐれ(二二ウ)

大納言経信

割わりこみの土間とまで見る人きうくつなあしのまろやに秋風あきかぜぞふく

祐子内親王家紀伊

そそうもの上さじきから茶ちやか酒さけかかけしや袖そでのぬれもこそすれ(二二オ)

前中納言匡房

奥深おくふかく花はなの仕かけを見わたして外山とよまの霞かすみた、ずもあらなむ

源俊頼朝臣

切落きりおとしあたりてけんくわ大さはぎはげしかれとはいのらぬものを(二二ウ)

藤原基俊

をしまれし役者は名残狂言にあはれことしの秋もいぬめり

法性寺入道前関白太政大臣

大仕懸海をだんく引上げて雲井にまがふ沖津しらなみ（二三才）

崇徳院

かりに居てはなすと成りのさんじきはわれても末にあはんとぞ思ふ

源兼昌

約束の芝居の供もまちなかへていく夜ねざめぬすまの関守（二三ウ）

左京大夫顕輔

三階にたなびく雲の間よりもれ出る月のかげのさやけさ

待賢門院堀河

とつた役むすんで出たる黒髪のみだれてけさはものをこそ思へ（二四才）

道因法師

うれひ場になかじとすれど女中づれうきにたえぬはなみだなりけり

後徳大寺左大臣

聞仕合する幕際は日おほひにたゞ有明の月ぞのこれる（二四ウ）

皇太后宮大夫俊成

笛の音は下坐に聞えて山翠簾の山の奥にも鹿そなくなる

藤原清輔朝臣

ながらへばまた菅原の白太夫うしと見し世ぞ今は恋しき（二五才）

俊恵法師

女形身を任すのもたからゆゑねやのひまさへつれなかるらむ

西行法師

やくしやよりからしを通すはな道にかこちがほなる我なみだかな（二五ウ）

寂蓮法師

見物もまづ今日はこれぎりときり立のぼる秋の夕ぐれ

皇嘉門院別当

業平もやつせば下部業平と身をつくしてや恋わたるべき（二六オ）

式子内親王

片鬘肩するの人も人の前ありてしのぶることのよわりもぞする

殷富門院大輔

白妙の晒の禪水仕合ぬれにぞぬれし色はかはらず（二六ウ）

後京極摂政太政大臣

敵役又傾城にふられては衣かたしきひとりかもねん

二條院讀岐

道行に見とれる女内證は人こそしらねかはく間もなし（二七オ）

鎌倉右大臣

花道や舞台の上を引道具あまの小舟のつなでかなしも

参議雅経

狂言に哀れもよほすむら雨のふるさとさむく衣うつなり（二七ウ）

前大僧正慈円

狂言の名代は富士見西行とわが立そまにすみぞめの袖

入道前大政大臣

仕舞まで見よとす、めもき、入れずふり行ものはわが身なりけり（二八オ）

権中納言定家

おまへさん何がしさんが御鼻屑とやくやもしほの身もこがれつ、

正三位家隆

大入の土間へもち込吸もの、みそ氣ぞ夏のしるしなりける（二八ウ）

後鳥羽院

かたき役ほろぼすときの太平記世を思ふゆゑにものおもふ身は

順徳院

時代事あたりて金のまうかれば猶あまりあるむかしなりけり（二九オ）

自跋

俳優の道は納れる御代のうつは物なりと。宜なる哉。幕あきの田の苧穂には。実をいれて見る芝居好あり。弁当を喰ひ酒を飲めば。我知らず腹のはる過て。夏来にけりな白妙の。湯かたびら着て棧敷に押合ひ。敦忠の唯暑きにも。躬恒の常に見るを喜び。よしあし曳の山と積るは。狂言の評役者の金箱。芝居を見ざる人までもつい打出て見る気になりけむ。田子のうら茶屋水茶屋まで。不時の（二九ウ）お客の木つどひて。入りは大江の千さとまでも。評判高くや聞ゆらん。されば法

性寺の御名長き日の。春道のつらきもいとほで。遠き近きも行平の。させむをいはず老若男女。としよりもゆき小町も来る。価のたかむらもやす秀といひ。きのつらゆきもよし忠と思ふは。おのく好む心より鬚眉の眼も迷ふなるべし。我も人もその志は在原の。業平ならぬ平土間に。壬生の忠見のどんぼうは。大中臣にはらふも有なん。是等の類はさらにもいはず。揃の手拭赤染あれば。仕着せ小袖の紫式部。(三〇オ)皆清輔の清らにいでたち。重之のしげく行かふ。花道に立人くをはじめて。定家家隆。家くくの役者の芸に到るまで。余さず漏さず狂歌に詠じて。どうけ百首の口まねする。彼あふむ石といふものに等しく。ついに集めて一冊となせり。人わらへなる業とはしれど。たゞに止むも朽惜しければ。板に鑄たる小倉山。をぐらきより猶明かに。出して恥をかきのもと。熟さぬ詞のあとや先。かぞへあげなば百敷や。古き趣向の愚さを。もし見給はむ人あらば。しのぶにも猶あまりある。たはけとやいはむわはいとはじといふ。諫鼓堂尾佐丸述(三〇ウ)

跋

諫鼓堂常に芝居を好み。又たはれ歌をたのしむ。狂言狂歌言の葉をならぶることおなじうして。見る人きく人の心くよく情をうつさしむ。花になく寝鳥の三絃。水に住む蛙丸のありかを見出し。猛きものふとなりては。力をもいれずして宙返りをさせ。篠笛の哀場には伝坊が入枕の鬼神もあはれを催す。古今集の序幕は六歌仙の評判記にして。見功者わるくちの芸評を述べたれば。大芝居三ツの櫓の位附も。遁れぬ中といふなるべし。されば三立目の暫に彩りの顔みせ狂言。公家悪の青い人丸は。中請の赤人のしもにたつ事かたく。風俗やさしき和歌女形あれば。恋歌にたくみ深き手代敵あり。夫が中にもをかしみに思入ある道外(三一オ)形の百人一首を種として。下の句の本神楽。詠への鳴物も。天智天王建の幕明より。地統てんつ、の出端もまじりて。勅使お入の百敷まで。あらまし仕組は整ひぬれど。イヨ役者御苦勞のわる口あらんことを恐れて。臆病口に引込思案。斯もあらうかの口拍子を。無理に其佞押出したるは。下り役者の食せ者か。新米作者の初舞台。お引合せは本町庵。則口序に述べたれど。くどうも願ふお目見えせり。二重舞台上障子

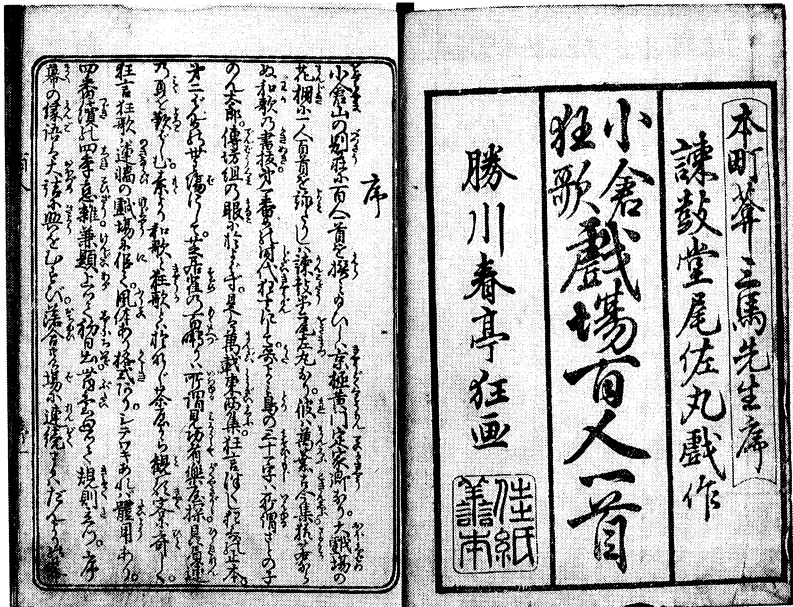
は。うつとしいのもかまはぬと。つけ声色こばいろのふきかへ姿すがた。ちよつと背うしろを見せてしかいふ。／鈍々亭和樽（印）／藍亭普米書（三二ウ）

文政三年庚辰春／正月吉日／鈍々亭藏版（印）／製本所／春松軒 西宮新六（印）

影印篇



表紙



(1才)



(4オ)

(3ウ)



(5オ)

(4ウ)



(5オ)

(5ウ)



(7オ)

(6ウ)



(8オ)

(7ウ)



(9オ)

(8ウ)



(10オ)

(9ウ)



(11オ)

(10ウ)



(14オ)

(13ウ)



(15オ)

(14ウ)



(18オ)

(17ウ)



(19オ)

(18ウ)



(24オ)

(23ウ)



(25オ)

(24ウ)



(26オ)

(26ウ)



(27オ)

(27ウ)



(28オ)

(27ウ)



(29オ)

(28ウ)



文政6年版，表紙(上)



文政6年版，表紙(下)



文政6年版(17オ)

文政6年版(16ウ)



文政6年版(18オ)

文政6年版(17ウ)